

4 出土遺物

(1) 瓦磚類

本調査では膨大な量の瓦磚類が出土した。現在整理作業中であり正確な点数・重量は不明だが、概算で整理用コンテナ2000箱は下らないとみられる。ここでは現在までに整理が完了した代表的な軒瓦を報告する。軒瓦の型式番号については『薬師寺報告』に準拠したが、特に奈良時代のものについては『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』（奈良国立文化財研究所、1996）の型式番号も合わせて記した。

軒丸瓦 1は外縁が凸線鋸齒文、外区が珠文の複弁八弁蓮華文で薬師寺2（6276A）型式。本薬師寺および薬師寺の創建瓦で18（薬師寺201・6641G）や薬師寺202（6641H）型式と組み合わせる。提示したものは大土坑SK3053出土のものだが、ほかにも多くの細片が壺地業から出土した。2は外縁素文の複弁八弁蓮華文で薬師寺6型式。3は外縁に忍冬文を、外区に珠文をめぐらす複弁八弁蓮華文で薬師寺32型式。SK3053から出土した。以上の3点は奈良時代に位置づけられる。

4は外区が珠文の複弁八弁蓮華文で薬師寺39型式。瓦溜まりSX3052から多数出土し、丸瓦部まで完存するものも多い。出土状況から、後述する26や27と組み合わせることが判明した。5は外区が珠文の複弁八弁蓮華文で薬師寺43型式。6も同じく外区珠文の複弁八弁蓮華文で薬師寺44型式。7は外区が珠文の単弁二十四弁蓮華文で薬師寺54型式。8は単弁蓮華文で弁数は17弁に復元できる。中房が八花形に突出しその周囲に蕊をめぐらすなど、薬師寺65や66型式に近似するが、弁は単弁で中房の蓮子が1+4である点や、外縁に珠文をもたない点が異なり、新型式である。9は外縁に輻射文、外区に珠文をめぐらす単弁六弁蓮華文で薬師寺76型式。瓦当径11cmほどの小型の瓦である。SK3053から出土した。10は外区珠文の単弁十六弁蓮華文で薬師寺84型式。11は外縁素文の単弁八弁蓮華文で、中房と弁区の間的一条の圏線をもち、間弁は棒状で弁端は円頭である。外縁との間的一条の圏線がめぐり、圏線の内側を三角形の文様がめぐる。中房には蓮子を配していたようだが、焼成前に乱雑に削り取られている。新型式である。以上の8点は平安時代に位置づけられる。

12は外区に珠文をめぐらす二巴左巻文で薬師寺110型式。範傷が生じており、珠文と圏線が接している箇所がある。SK3053から出土した。13は外縁素文の二巴左巻文で、巴頭部先端がわずかに接し、巴の尾部は一方のみ圏線にとりつく。SK3053から多く出土し、丸瓦部まで完存するものも多い。これまでに同文の軒丸瓦は知られていなかったが、薬師寺145型式に該当するとみられ、全体の文様が不明で外区素文の三巴左巻文とされていた型式である。SK3053における出土点数の多さや良好な遺存状態から、後述する32と組み合わせる可能性が高い。14は外区に珠文をめぐらす二巴左巻文で、珠文の内側に一重の圏線をめぐらす。巴頭部先端が尖り、巴の尾部は圏線にとりつかない。新型式である。15は外区に珠文をめぐらす三巴左巻文で薬師寺147型式。SK3053から出土した。以上の4点は鎌倉時代に位置づけられる。

16は外区に珠文をめぐらす三巴左巻文で薬師寺193型式。江戸時代に位置づけられる。

17は外縁忍冬文で外区珠文の複弁八弁蓮華文で薬師寺70型式。明治時代の補修瓦である。

軒平瓦 18は右偏行唐草文の薬師寺201（6641G）型式。本薬師寺および薬師寺の創建瓦である。提示したものは包含層出土だが、壺地業からも細片が多数出土している。19は外区圏線文の均整唐草文で薬師寺214（6663H）型式。20は外区珠文の均整唐草文で薬師寺218（6664O）型式。21は外区圏線文の均整唐草文で薬師寺219（6665B）型式。SK3053から出土した。以上4点は奈良時代に位置づけられる。

22は上外区に珠文、下外区に線鋸齒文を配する均整唐草文で薬師寺237型式。SK3053から出土した。23は外区珠文の均整唐草文で薬師寺240型式である。SK3053から出土した。24は外区珠文の均整唐草文で薬師寺241型式。下弦幅22cmほどの小型瓦であり、SK3053から出土した。25は上外区に珠文、下外区と脇区に線鋸齒文を配する均整唐草文で薬師寺244型式。全体的に箔ずれが強く出ており、文様が二重になっている部分もある。26は上外区に珠文、下外区に線鋸齒文を配する均整唐草文で薬師寺245型式。27は外区素文の均整唐草文で薬師寺254型式。26と27は瓦溜まりSX3052から4と組み合せて出土した。28は上外区に珠文を配する均整唐草文で、これまで良好な遺存例が知られていなかったが、薬師寺273型式に該当するとみられる。上弦幅21cmほどの小型瓦であり、SK3053から出土した。29は外区素文の宝相華唐草文で薬師寺281型式である。SK3053から出土した。以上8点は平安時代に位置づけられる。

30は外区素文で木葉文をもつ薬師寺291型式。31は外区素文で剣頭文をもつ薬師寺298型式。32は外区素文で左卷三巴文を均等に5個配する薬師寺303型式。顎部が平瓦部から剥離しているものも認められるため、瓦当部の接合技法は顎貼付け技法によるとみられる。SK3053から多く出土しており、平瓦部を完存するものも多い。出土状況ならびに完存品が多いという点から、13と組み合わせる可能性がある。33は薬師寺305型式で「薬師寺仁治壬寅」の年号銘(1242年)をもつ。土坑SK3048から出土した。34は外区素文の唐草文で薬師寺322型式である。SK3053から出土した。以上5点は鎌倉時代に位置づけられる。

35は外区素文で橘唐草文をもち、江戸時代に位置づけられる。

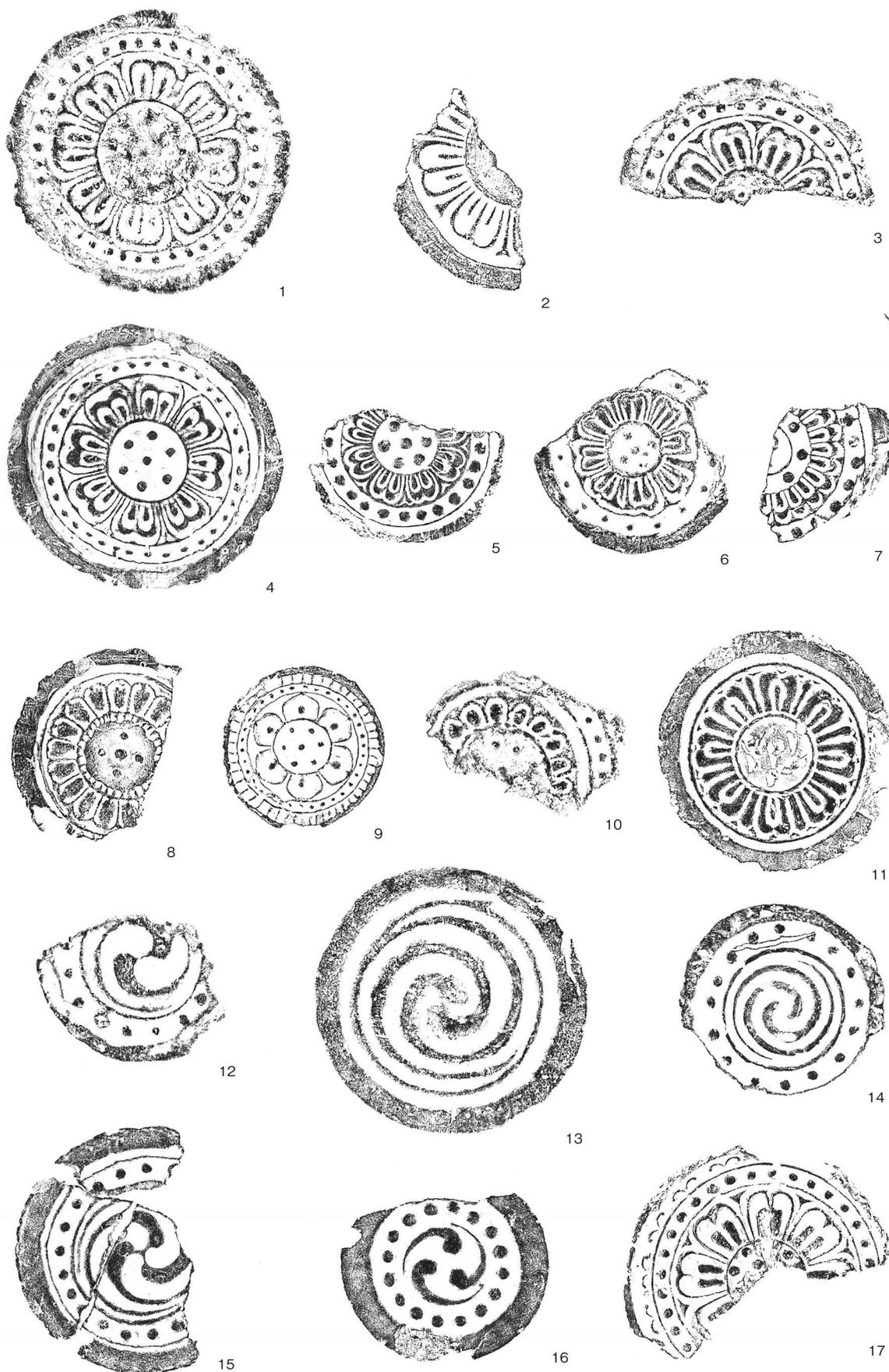
小 結 今回の調査で出土した軒瓦は、現状で確認しうる限り室町時代の軒瓦の数がやや少ない印象を受けるが、本薬師寺の創建瓦から明治時代のものまであらゆる時代の瓦がみられる。また、出土地点ごとにいくつかの傾向を指摘できる。

現時点で判明している壺地業出土の軒瓦には本薬師寺および薬師寺創建瓦を多く含む。出土点数では薬師寺2(6276A)型式と薬師寺201(6641G)型式が多いが、薬師寺202(6641H)型式もみられる。

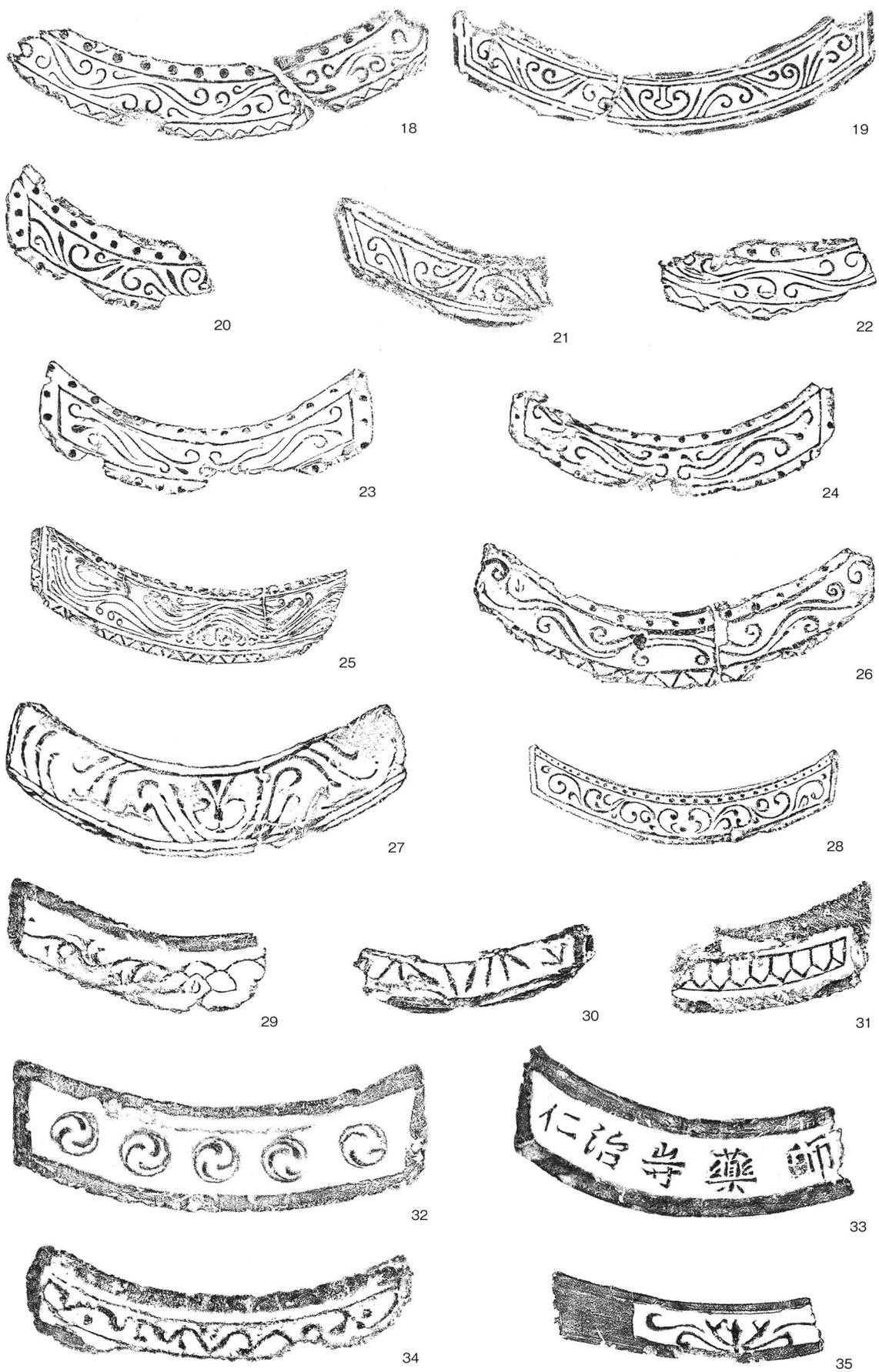
瓦溜まりSX3052は、遺構の様相から食堂の屋根から落下した瓦の可能性が高い。ここからは軒丸瓦は4、軒平瓦は26と27が出土しており、再建時の食堂所用瓦の組み合わせとして注目できる。いずれも平安時代中期に位置づけられることから、寛弘2年(1005)の再建された食堂にもちいられたものと考えられる。軒丸瓦が1型式なのに対して軒平瓦が2型式みられる点は興味深い。

大土坑SK3053からは本薬師寺および薬師寺創建瓦から鎌倉時代までの軒瓦が出土している。現状で把握している限りでは15や34など、鎌倉時代のものももっとも新しく、土坑SK3048から出土した33の年号銘も参照できる。かなり幅広い時期の瓦が廃棄されたことがわかるが、その中でも13や32の出土が多く、またどちらも完形で出土しているものが多い点で共通する。両者は時期的にも近接するとみられ、組み合わせる可能性がある。ただしSK3053からは、9や24や28のような裳階用とみられる小型瓦も出土しており、食堂以外の建物に葺かれていた瓦もまとめて廃棄されている可能性が高い。仮に13と32のセット関係を認めた場合にも、それらが食堂にもちいられていたかどうかは確定できない。

本調査で出土した瓦の大半は現在整理作業中であり、ここで提示した理解も暫定的なもののため随時更新される可能性がある。今後整理作業を進めた上で、正式な報告をおこないたい。



第21图 出土軒丸瓦 (1 : 4)



第22図 出土軒平瓦 (1 : 4)

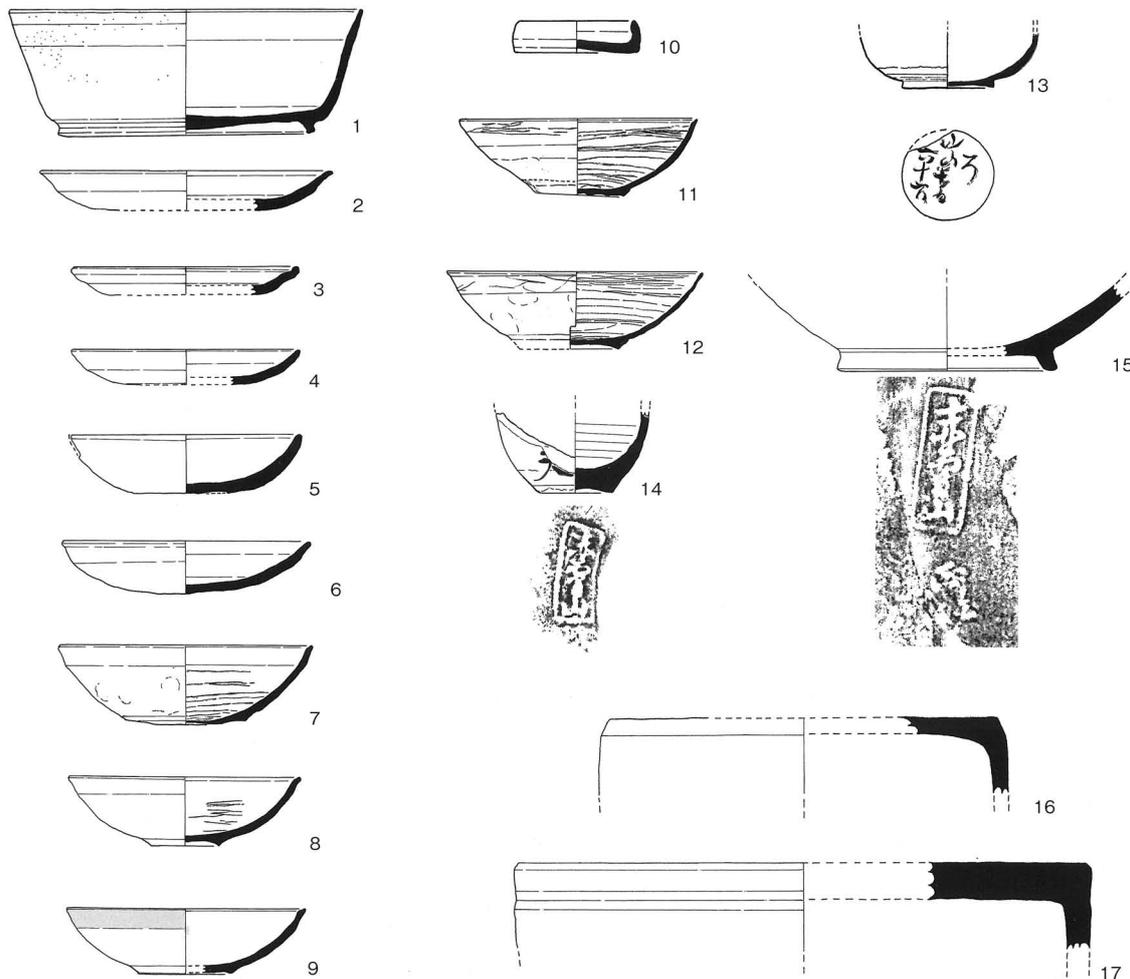
(2) 土器・土製品

調査区全域から出土した土器・土製品は整理箱7箱程度で、瓦の出土量に比べれば、きわめて少ないと言わざるをえない。奈良時代の須恵器・土師器・奈良三彩、平安時代の灰釉陶器、中近世の土師器皿、瓦器椀、瓦質土器、赤膚焼を含む近世陶磁器、印判染付など近代以降の陶磁器などが出土した。古代のものは少量で、13世紀以降のものが中心である。

遺構からは、基壇南辺を大きく掘り込む大土坑SK3053から比較的まとまって土器が出土したものの、整理箱1箱程度である。以下、食堂の変遷を考えるうえで重要な資料を中心に述べる（第22図）。

奈良時代の土器 1は基壇の壺地業から出土した須恵器杯Bである。ほぼ完形に復することができる。青灰色の胎土で、陶邑窯産であろう。法量と高台の付き方からみて、奈良時代前半として矛盾はない。壺地業からは、このほかにも奈良時代の須恵器、土師器が出土しているが、いずれも小片かつ少量である。また、奈良三彩の小片も3点出土した。SK3053出土のものは三彩鉢の胴部で、内面にも透明釉が残る。包含層や表土から出土したものは、二彩の瓶または壺の胴部片で、内面の釉はいずれも残っていない。

既往の薬師寺の発掘調査では、30点近い奈良三彩が出土しているが、僧房や十字廊など食堂周辺からの出土が多い傾向が指摘できる。西大寺食堂院の調査でも奈良三彩が大量に出土しており（奈良文



第23図 出土土器実測図（1：4、14のみ1：2、拓本は等倍）

化財研究所2007『西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告書』)、薬師寺における奈良三彩の出土傾向と合わせ、奈良三彩器物の保管に関して示唆的な成果をもたらしたといえる。

中世の土器 瓦溜まりSX3052から、瓦器片と土師器皿が出土した。2は土師器小皿。口縁部外面直下に強く一段ナデを施し、口縁端部は細い。底部は指おさえの痕跡が残る。胎土は淡褐色。3は「て」の字状口縁の土師器小皿。器壁は厚く、底部は丸く、口縁端部は丸く巻き込む。焼成は比較的堅緻である。瓦器は小片で、年代をはかりかねるが、土師器皿は11世紀末～12世紀頃の様相を呈し、食堂が廃絶する直前の時期のものであろう。

基壇南辺を大きく掘り込むSK3053から出土した土器は、奈良時代の須恵器杯Bや平安時代の土師器皿なども一定量含むものの、瓦器椀は川越編年の第Ⅲ段階のA型式～C型式(12世紀後半から13世紀)にかけてものが主体的である(川越俊一1983「大和地方の瓦器をめぐる二・三の問題」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所)。

4～6は土師器皿。口縁部直下を1段ナデする。7～9は瓦器椀。器壁が薄く、指オサエの痕跡が明瞭に残り、高台は矮小である。10は瓦器小皿。口縁部が直角に立つが、角は丸みを帯びる。土坑SK3048からは完形の瓦器椀(11・12)が出土した。口径は12.5～13.5cm。外面は口縁端部付近にのみミガキを施す。SK3053の下限に近い時期に比定できよう。

近世・近代の陶磁器 食堂の基壇を覆う包含層などからは、瓦質土器、染付、灯明皿の土師器皿などとともに、赤膚焼に関連する遺物が比較的まとまって出土した。赤膚焼は現在でも薬師寺の近隣に開窯しており、窯場から出た廃棄物が混入したのであろう。

13は赤膚焼の茶壺か茶碗であろう。高台に「万／□[山カ]のちる／六十六」と墨書がある。14はきわめて小さい壺である。残存する胴部下方に「天」らしき字が残る。底部には「赤膚山」の印がある。15は大型の壺であろう。高台の内側に「赤膚山」の印の下に「正松」の印がある。同様の印を押す赤膚焼は薬師寺の西塔北側の立会調査でも出土している。その他、16・17は匣鉢。匣鉢は他にも4点出土しているが、16は口径21.6cm、17は口径30.6cmで、法量から2種類に分けられる。やや大粒の砂を含む胎土で、外面は粗い轆轤目を残すものもある。

(3) 金属製品・石製品・銭貨

金属製品 金銅製の垂木先金具が3点(うち2点は同一個体)、鉄角釘、鉄鏝などが出土した。鉄釘や鉄鏝などは、表土や基壇土上の盛土内からの出土で、遺構に直接関係するものはみられない。

第23図1・2は金銅製垂木先金具である。

1は2点で構成されるもので、約14cm四方の方形に復元できる。透彫によって文様を彫るが線刻等はみられない。蛍光X線分析によって表面から金が検出されており、鍍金されていたと考えられる。2は、約4cmの断片である。全体形は不明だが1の文様とは異なる。これらは全て、基壇東面の雨落溝SD3049を破壊する土坑SK3067より出土した。

石製品 花崗岩製の手水鉢と思われるものが1点、砥石が3点出土した。いずれも表土あるいは包含層より出土した。

銭貨 表土から寛永通宝が1点出土した。



第24図 垂木先金具(1:4)